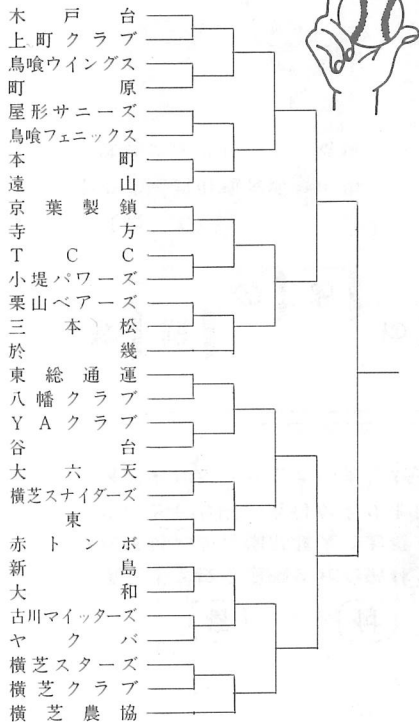
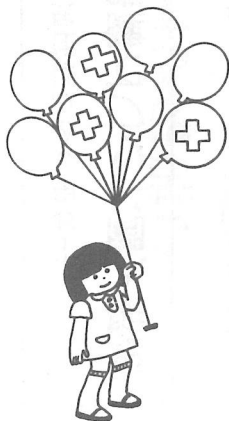


## 球音高くシーズン到来! 第7回春季町民野球大会

7回目を迎えた「春季町民野球大会」(主催・横芝町野球連盟)の組合せが、次のとおり決定し、いよいよ5月8日から熱戦の火ぶたが切られることになりました。



## 5月1日~6月30日 赤十字運動月間



赤十字は小さな善意のまとめ役です。  
あなたの善意が紛争や災害に苦しむ多  
くの人々を救います。

### 赤十字社員になろう!

昔の真福寺の住職は法眠の位を持つ格式がありました。そうした名僧知識との親交に依ったのでしようか、この市原家は代々学問を好む人が多く出ていました。そして支配下の農家の人々を集めては読み書き等を教えていました。特に義房という人が当主であった頃には、屋敷の一室を若者達のために開放して寺小屋式の教室を始めました。「庄屋さんの寺小屋」この噂は友が友を呼び、教えを乞う青年は日毎に増え、「名主さん」と呼ぶ人より「先生」と呼んだ方が分りよい位になりました。その教子の中で、特に頭角を現していた猪野忠右門という青年が後の晋齋市原先生なのです。◎写真は忠右門先生の墓碑で、その側の墓石は義房先生です。なお、本稿取材には鳥喰下の市原英男氏と押尾好文氏のご指導をいただいております。

## 横芝の碑

<124>

町文化財審議会委員  
小沢春光さん寄稿

## 寺小屋名主とその弟子(上)

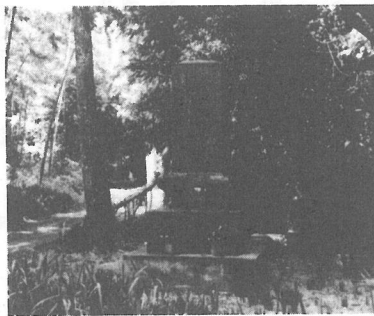
昨年十二月号の本紙で「市原計衛先生の碑」をご紹介して間もなく、或用件で栗山の虚空堂という古寺を訪れた時のことです。

お堂の周辺に点在している仏像や旧家の墓石等を見学しているうちに、「若梅惟式之墓」という墓石の側面に「この人が先生であつたこと、鳥喰の市原忠衛門とい

先生に師事し、教育者として活躍され、明治二年に逝くなられた」という意味の刻銘を見つけました。明治二年に逝くなられた方の先生、というのですから市原計衛先生とは勿論別の方が居られた筈と考えましたので、横芝町としても有数

の旧家であり、文化財関係の大先輩でもある、地元の押尾好文氏にお聞きしてみますと、「それは明治維新以前の人で、鳥喰下の真福寺という寺の墓地に碑文を刻んだ立派な墓石が建っている。その子孫は現在の市原英男さんの家である」ということでした。

真福寺は、鳥喰下の集落の裏通りの道筋に沿って墓地が並び、一番西側に当る所に、最近まで集会所を兼ねていたという本堂が建っていました。その建物を背にして建っている一番大きく、一見等身大に見える墓石が、市原忠右衛門先生追慕の碑なのです。



墓碑は、蓮華状の飾を付けた五段造りで、正面には五三の桐の家紋が刻まれ、その下に「晋齋市原先生之墓」そして側面には「先生姓市原文字子良号晋齋稱福羽兄通稱忠右衛門性温厚篤実而寿好書不求名利(中略)善俳諧以之為樂尤冠和筆古蹟同邑猪野氏二男也妻委佐倉郷某氏之女唯一女而天札後妻生子宿邑某氏之妻叭其一女配栗山柳若梅氏二男干、時嘉永辛亥春

正月二十五日卒葬千天醫山真福寺先笠之側享年五十有八矣門人計三百有余皆相議以樹碑後野無何接記後昆聊為耐師思作銘銘曰、揮一篠筆、令千人拓、總之地広、總之海遙、性者安政五年龍以戊午冬十月二十五日、法眼薰齋松本正祐書、高頭院昌岳道繁居士。「何処までも曲る道なり春の風」と刻まれ、台座には、両総筆子中と刻まれています。

碑文を写し終え、その子孫であるという市原英男氏を訪ねて見ました。同氏が碑文の原書等を示されながら説明してくださったお話と碑文の内容によりますと、「文化文政から明治にかけ(一八〇〇)頃の頃、鳥喰下地域の名主は市原某という家でした。近くの名利天醫山真福寺と地続きに屋敷を構え、その住職とは極めてじつ懇の間柄でした。

昔の真福寺の住職は法眠の位を持つ格式がありました。そうした名僧知識との親交に依ったのでしようか、この市原家は代々学問を好む人が多く出ていました。そして支配下の農家の人々を集めては読み書き等を教えていました。特に義房という人が当主であった頃には、屋敷の一室を若者達のために開放して寺小屋式の教室を始めました。「庄屋さんの寺小屋」この噂は友が友を呼び、教えを乞う青年は日毎に増え、「名主さん」と呼ぶ人より「先生」と呼んだ方が分りよい位になりました。その教子の中で、特に頭角を現していた猪野忠右門という青年が後の晋齋市原先生なのです。◎写真は忠右門先生の墓碑で、その側の墓石は義房先生です。なお、本稿取材には鳥喰下の市原英男氏と押尾好文氏のご指導をいただいております。